

領域「環境」と発達に関連 —「環境」を支える発達心理学—

野 島 正 剛
Nojima Seigou

要 約

本稿は領域「環境」を発達との視点で整理し若干の考察を加えたものである。領域「環境」を考える前に、「環境を通した教育」とは何かを整理した。「環境を通した教育」における「環境」とは、単なる物ではなく、子ども自身が好奇心や意欲をもって能動的にかかわろうとする『もの』や『ひと』や事象や生活であり、空間や雰囲気を示している。領域「環境」はそれを踏まえ、『もの』や『ひと』の環境をどのように構成するのか、また、発達を支えるためにどのような環境が必要なのかを整理し、保育者養成における「環境」の取り扱いと、「発達心理学」の取り扱いの2点について整理した。その上で、環境と発達に関連について、保育者養成に必要な視点から整理し、若干の考察を加えた。

キーワード：環境 発達心理学 教育実習 保育実習 事前事後指導

1 はじめに

現行「幼稚園教育要領」は、平成元年改訂の「幼稚園教育要領」を踏襲して作成されたものである。平成元年「幼稚園教育要領」では、従来6領域（健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画作成）であった教育内容を見直し、5領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）とする大幅な改訂が行われた。また、幼稚園教育を、環境による保育を通して行うものと位置づけた。この環境による保育を齋藤（2006）は「保育者が子どもと信頼関係を築きながら豊かな環境を創造することによって子どもの主体性・自発性を引き出す保育をさしている。ここでの環境は、単なる物ではなく、子ども自身が好奇心や意欲をもって能動的にかかわろうとする『もの』や『ひと』や事象や生活である」としている。

筆者は保育者養成において実習の事前事後指導を行う中で、指導案の作成や日誌、あるいは実習園からの評価から学生の中に「環境による保育」のとらえ方が十分ではない学生がいるこ

とに気がついた。このとらえ方が十分ではない学生に「環境による保育」の意味を確認すると、「環境」という言葉からか単に自然環境と捉えている学生、領域としての「環境」を教科のように捉えている学生、「環境」のみで教師の役割を理解していない学生など、様々な学生がいた。これらの学生から、「環境」とは何か十分に理解できておらず、実習における観察の視点や日誌の甘さにつながっていることが推測された。また、学生からは5領域はそれを統合させる科目として「保育内容総論」が設定され、大学のカリキュラム上からも、また、教育内容・保育内容としても「統合」が意識されやすい。それに対して、発達段階との統合が難しく、領域毎に発達との関連を学ぶものの、どのように統合された5領域の学びと結びつけばよいのかわからないといった声が聞かれた。

幼稚園教諭免許状、保育士資格を取得し保育現場で働くためには養成校で学んだ事柄の統合が必要となるが、実習を行う段階では統合が十分ではなく、それに加え発達段階を理解しないあるいは、発達と保育内容の結びつけが十分ではないまま実習を行っている事は大きな問題である。しかしながら、特に短期大学の2年間という短い養成期間の中では一人一人の学生の中での学びの統合が十分ではない時点で実習を行なわなければならない現実がある。そのため「環境」の捉え方が十分ではないまま実習での学びを行なってしまい学びがその時点で止まってしまい、学びが深まらないまま終わってしまうのではないかと思われる。しかし幼稚園教育要領における領域「環境」のねらい(3)では「身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする」とあり、特に発達段階を踏まえた視点が必要となる。

そこで本稿では、領域「環境」と発達心理学の内容を整理するとともに、領域「環境」の理解深化を行うために、「環境」と発達心理学との関連について整理を試みたい。

2 領域「環境」のねらいと内容

1. 「環境」の位置づけ

学校教育法第77条には「幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」とあり、幼稚園教育の目的である幼児の心身発達助長を達成するために、適切な環境を与えることと明記している。またこれを受け、幼稚園教育要領の第1章総則、1 幼稚園教育の基本においては「幼稚園教育は、学校教育法第77条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。

このため、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。これらを踏まえ、次に示す事項を重視して教育を行わなければならない。」とし、環境の重要性を示している。

幼稚園教育が「環境を通して行う」と位置づけられたのは平成元年改訂の「幼稚園教育要領」からである。この背景には、1986年、報告書「幼稚園教育の在り方」に「幼稚園教育

の目標が有効に達成されるためには、幼児が自発的・主体的にかかわれるように環境の構成が最も大切である」と報告されたからである。この報告書には、環境には人的・物的の両要素があること、その核に教師があり、教師の果たす役割の重要性が示されている。

無藤（2003）は環境と教員の関係について、「環境を通して保育するという意味は、環境は意図的に構成するけれど、個々の行為の全てについて細かく指導はしないということです」「どんなものが環境にあり、どのような人が環境にいるのかの基本は、保育者が設定しています」「子ども自身は環境の中にいて、環境から何かを取り出すかを決めるだけでなく、環境を変えて行くものでもあります」「他の遊びの予定があっても（略）予定を変えたりします。そんなこともまた環境設定なのです」として、教育環境の創造には、教師の役割が重要であるとしている。

幼児教育・保育の場における「環境」とは、子どもを取り巻く全てであり、自然や人、事象、それらが醸し出す雰囲気、時間や空間（依田，2004）をさし、保育者が構成しつつ、子どもが自発的・主体的にかかわりながら変えるものであり、保育者は環境を中心に据えながら、日々の保育を行う必要がある。

2. 幼稚園教育要領における「環境」

幼稚園における「環境」の取り扱いについては、幼稚園教育要領の「第2章ねらい及び内容」に示されている。この第2章の冒頭に保育の内容を幼児の発達の側面から以下の5つの領域で示している。

1. 心身の健康に関する領域「健康」
2. 人とのかかわりに関する領域「人間関係」
3. 身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」
4. 言葉の獲得に関する領域「言葉」
5. 感性と表現に関する領域「表現」

各領域には「ねらい」が示されており、「幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度など」を示している。そして「幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうもの」とされている。

また各領域には同様に「内容」が示されている。内容は「ねらいを達成するために指導する事項」とされており、「幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない」とされている。

幼稚園教育要領における領域「環境」の内容を確認すると以下のようになっている。

「環境」

周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうと

する力を養う。

1 ねらい

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

2 内容

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な物を大切にすること。
- (6) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- (7) 身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- (8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
- (9) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
- (10) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
- (11) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 幼児が、遊びの中で周囲の環境とかかわり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。
- (2) 幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること。
- (3) 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。
- (4) 数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切に、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。

3. 保育所保育指針における「環境」

保育所保育指針においては、「2 保育の内容構成の基本方針」の「(1) ねらい及び内容」に、保育の内容が「ねらい」及び「内容」から構成されていることが示されている。

「ねらい」は「保育の目標をより具体化したものである。これは、子どもが保育所において安定した生活と充実した活動ができるようにするために、『保育士が行わなければならない事項』及び子どもの自発的、主体的な活動を保育士が援助することにより、『子どもが身につけることが望まれる心情、意欲、態度などを示した事項』である」と示されている。

また「内容」は、「これらのねらいを達成するために、子どもの状況に応じて保育士が適切に行うべき基礎的な事項及び保育士が援助する事項を子どもの発達の側面から示したものである」としている。

「領域」については、「保育士が援助して子どもが身に付けることが望まれる事項について発達の側面から以下の領域が設けられている」とし、幼稚園教育要領同様に、以下の5領域が設けられている。

1. 心身の健康に関する領域である「健康」
2. 人との関わりに関する領域である「人間関係」
3. 身近な環境との関わりに関する領域である「環境」
4. 言葉の獲得に関する領域である「言葉」
5. 感性と表現に関する領域である「表現」

この5領域は、3歳未満児と3歳以上児とでは取り扱いが異なっている。3歳未満児においては、発達の特性から、各領域を明確に区分することが困難な面が多く、5領域に配慮しながら、基礎的な事項とともに一括して示した取り扱いがなされている。

また保育の展開についても言及しており、「具体的には子どもの活動を通して展開されるものであるので、その活動は一つの領域だけに限られるものではなく、領域の間で相互に関連を持ちながら総合的に展開」するものであるとしている。

なお、保育所の対象年齢が乳児からと言う事もあり、保育の内容の発達区分については以下の設定になっている。

- 6か月未満児
- 6か月から1歳3か月未満児
- 1歳3か月から2歳未満児
- 2歳児から6歳児までは1年ごと

このうち、3歳以上児は前述の幼稚園教育要領と5領域が同内容となっているため、3歳未満児の保育の内容と、3歳以上児の「基本的事項」について確認する必要がある。上述のように、3歳未満児では、発達段階を踏まえ、5領域を区別する事が困難であるため、各領域が、養護の視点である基本的事項を含めた形で示されている。

6か月未満児の保育の内容

ねらい

- (1) 保健的で安全な環境をつくり、常に体の状態を細かく観察し、疾病や異常は早く発見し、

快適に生活できるようにする。

- (2) 一人一人の子どもの生活のリズムを重視して、食欲、睡眠、排泄などの生理的欲求を満たし、生命の保持と生活の安定を図る。
- (3) 一人一人の子どもの状態に応じて、スキンシップを十分にとりながら心身ともに快適な状態をつくり、情緒の安定を図る。
- (4) 個人差に応じて授乳を行い、離乳を進めて、健やかな発育・発達を促す。
- (5) 安全で活動しやすい環境の下で、寝返りや腹ばいなど運動的な活動を促す。
- (6) 笑ったり、泣いたりする子どもの状態にやさしく応え、発声に応答しながら喃語を育む。
- (7) 安心できる人的、物的環境のもとで、聞く、見る、触れるなど感覚の働きが豊かになるようにする。

内容

- (1) 一人一人の子どもの健康状態を把握し、異常のある場合は適切に対応する。
- (2) 一人一人の子どもの心身の発育や発達の状態を的確に把握する。
- (3) 体、衣服、身の回りにあるものを、常に清潔な状態にしておく。
- (4) 一人一人の子どもの生理的欲求を十分に満たし、保育士の愛情豊かな受容的な関わりにより、気持ちのよい生活ができるようにする。
- (5) 授乳は、抱いて微笑みかけたり、優しく言葉をかけたりしながら、ゆったりとした気持ちで行う。
- (6) ミルク以外の味やスプーンから飲むことに慣れるようにし、嘱託医などと相談して一人一人の子どもの状態に応じて離乳を開始する。
- (7) 一人一人の子どもの生活のリズムを大切にしながら、安心してよく眠れるように環境を整える。
- (8) おむつが汚れたら、優しく言葉をかけながらこまめに取り替え、きれいになった心地よさを感じることができるようにする。
- (9) 一人一人の子どもの状態に応じて、嘱託医などと相談して、積極的に健康増進を図る。
- (10) 室内外の温度、湿度に留意し、子どもの健康状態に合わせて衣服の調節をする。
- (11) 授乳、食事の前後や汚れたときは、優しく言葉をかけながら顔や手を拭く。
- (12) 立位で抱かれたり、屈伸、腹ばいなど体位を変えてもらって遊びを楽しむ。
- (13) 子どもに優しく語りかけをしたり、歌いかけたり、泣き声や喃語に答えながら、保育士との関わりを楽しいものにする。
- (14) 優しく言葉をかけてもらいながら、聞いたり、見たり、触ったりできる玩具などで遊びを楽しむ。

6 か月から1歳3か月未満児の保育の内容

ねらい

- (1) 保健的で安全な環境をつくり、体の状態を細かく観察し、疾病や異常の発見に努め、快適に生活できるようにする。
- (2) 一人一人の子どもの生活のリズムを重視して、食欲、睡眠、排泄などの生理的欲求を満たし、生命の保持と生活の安定を図る。
- (3) 一人一人の子どもの甘えなどの依存欲求を満たし、情緒の安定を図る。
- (4) 離乳を進め、様々な食品に慣れさせながら幼児食への移行を図る。
- (5) 姿勢を変えたり、移動したり様々な身体活動を十分に行えるように、安全で活動しやすい環境を整える。
- (6) 優しく語りかけたり、発声や喃語に応答したりして、発語の意欲を育てる。
- (7) 聞く、見る、触るなどの経験を通して、感覚や手や指の機能を働かそうとする。
- (8) 絵本や玩具、身近な生活用具が用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心が芽生える。

内容

- (1) 一人一人の子どもの健康状態を把握し、異常のある場合は適切に対応する。
- (2) 一人一人の子どもの心身の発育や発達の状態を的確に把握する。
- (3) 体、衣服、身の回りにあるものを、常に清潔な状態にしておく。
- (4) 一人一人の子どもの生理的欲求を十分に満たし、保育士の愛情豊かな受容により気持ちのよい生活ができるようにする。
- (5) 楽しい雰囲気の中で、喜んで食事ができるようにし、嘱託医などと相談して離乳を進めながら、次第に幼児食に移行させる。
- (6) 一人一人の子どもの生活のリズムを大切にしながら、眠いときは安心して十分に眠ることができるようになるようにする。
- (7) 一人一人の子どもの排尿間隔を把握しながら、おむつが汚れたら、優しく言葉をかけながらこまめに取り替え、きれいになった心地よさを感じることができるようになるようにする。
- (8) 一人一人の子どもの状態に応じて、嘱託医などと相談して、積極的に健康増進を図る。
- (9) 室内外の温度、湿度に留意し、子どもの健康状態に合わせて衣服の調節をする。
- (10) 食事の前後や汚れたときは、顔や手を拭いて、清潔になることの快さを喜ぶようにする。
- (11) 寝返り、はいはい、お座り、伝い歩き、立つ、歩くなどそれぞれの状態に合った活動を十分に行う。
- (12) つまむ、たたく、ひっぱるなど手や指を使って遊ぶ。
- (13) 喃語や片言を優しく受け止めてもらい、発語や保育士とのやりとりを楽しむ。
- (14) 生活や遊びの中での保育士のすることに興味を持ったり、模倣したりすることを楽しむ。
- (15) 保育士の歌を楽しんで聞いたり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しむ。
- (16) 保育士と一緒にきれいな色彩のものや身近なものの絵本を見る。

(17) 保育士に見守られて、玩具や身の回りのもので一人遊びを十分に楽しむ。

1 歳 3 か月から 2 歳未満児の保育の内容

ねらい

- (1) 保健的で安全な環境をつくり、体の状態を観察し、快適に生活できるようにする。
- (2) 一人一人の子どもの生理的欲求や甘えなどの依存欲求を満たし、生命の保持と情緒の安定を図る。
- (3) 様々な食品や調理形態に慣れ、楽しい雰囲気のもとで食べることができるようにする。
- (4) 一人一人の子どもの状態に応じて、睡眠など適切な休息をとるようにし、快適に過ごせるようにする。
- (5) 安心できる保育士との関係の下で、食事、排泄などの活動を通して、自分でしようとする気持ちが芽生える。
- (6) 安全で活動しやすい環境の中で、自由に体を動かすことを楽しむ。
- (7) 安心できる保育士の見守りの中で、身の回りの大人や子どもに関心を持ち関わろうとする。
- (8) 身の回りの様々なものを自由にいじって遊び、外界に対する好奇心や関心を持つ。
- (9) 保育士の話しかけや、発語が促されたりすることにより、言葉を使うことを楽しむ。
- (10) 絵本、玩具などに興味を持って、それらを使った遊びを楽しむ。
- (11) 身近な音楽に親しみ、それに合わせた体の動きを楽しむ。

内容

- (1) 一人一人の子どもの健康状態を把握し、異常のある場合は適切に対応する。
- (2) 一人一人の子どもの心身の発育・発達の状態を的確に把握する。
- (3) 体、衣服、身の回りにあるものを、常に清潔な状態にしておく。
- (4) 一人一人の子どもの気持ちを理解し、受容することにより、子どもとの信頼関係を深め、自分の気持ちを安心して表すことができるようにする。
- (5) 楽しい雰囲気の中で、昼食や間食が食べられるようにする。
- (6) スプーン、フォークを使って一人で食べようとする気持ちを持つようにする。
- (7) 一人一人の子どもの生活のリズムを大切にしながら、安心して午睡などをし、適切な休息ができるようにする。
- (8) おむつやパンツが汚れたら、優しく言葉をかけながら取り替え、きれいになった心地よさを感じることができるようにする。
- (9) 一人一人の子どもの排尿間隔を知り、おむつが汚れていないときに便器に座らせ、うまく排尿できたときはほめることなどを繰り返し、便器での排泄に慣れるようにする。
- (10) 室内外の温度、湿度に留意し、子どもの状態に合わせて衣服の調節をする。
- (11) 保育士の優しい言葉かけと援助で、衣服の着脱に興味を持つようにする。

- (12) 食事の前後や汚れたときは顔や手を拭いて、きれいになった快さを感じることができるようにする。
- (13) 登る、降りる、跳ぶ、くぐる、押す、引っ張るなどの運動を取り入れた遊びや、いじる、たたく、つまむ、転がすなど手や指を使う遊びを楽しむ。
- (14) 保育士に見守られ、外遊び、一人遊びを十分に楽しむ。
- (15) 好きな玩具や遊具、自然物に自分から関わり、十分に遊ぶ。
- (16) 保育士の話しかけを喜んだり、自分から片言でしゃべることを楽しむ。
- (17) 興味ある絵本を保育士と一緒に見ながら、簡単な言葉の繰り返しや模倣をしたりして遊ぶ。
- (18) 保育士と一緒に歌ったり簡単な手遊びをしたり、また、体を動かしたりして遊ぶ。

2 歳児の保育の内容

ねらい

- (1) 保健的で安全な環境をつくり、快適に生活できるようにする。
- (2) 一人一人の子どもの欲求を十分に満たし、生命の保持と情緒の安定を図る。
- (3) 楽しんで食事、間食をとることができるようにする。
- (4) 午睡など適切に休息の機会をつくり、心身の疲れを癒して、集団生活による緊張を緩和する。
- (5) 安心できる保育士との関係の下で、食事、排泄などの簡単な身の回りの活動を自分でしようとする。
- (6) 保育士と一緒に全身や手や指を使う遊びを楽しむ。
- (7) 身の回りに様々な人がいることを知り、徐々に友達と関わって遊ぶ楽しさを味わう。
- (8) 身の回りのものや親しみの持てる小動物や植物を見たり、触れたり、保育士から話を聞いたりして興味や関心を広げる。
- (9) 保育士を仲立ちとして、生活や遊びの中で言葉のやりとりを楽しむ。
- (10) 保育士と一緒に人や動物などの模倣をしたり、経験したことを思い浮かべたりして、ごっこ遊びを楽しむ。
- (11) 興味のあることや経験したことなどを生活や遊びの中で、保育士とともに好きなように表現する。

内容

- (1) 一人一人の子どもの健康状態や発育・発達状態を把握し、異常のある場合は適切に対応する。
- (2) 生活環境を常に清潔な状態に保つとともに、身の回りの清潔や安全の習慣が少しずつ身につくようにする。
- (3) 一人一人の子どもの気持ちを理解し、受容することにより、子どもとの信頼関係を深め、

自分の気持ちを安心して表すことができるようにする。

- (4) 楽しい雰囲気の中で、自分で食事をしようとする気持ちを持たせ、嫌いなものでも少しずつ食べられるようにする。
- また、食事の後、保育士の手助けによって、うがいなどを行うようにする。
- (5) 落ち着いた雰囲気の中で十分に眠る。
- (6) 自分から、あるいは言葉をかけてもらうなどして便所に行き、保育士が見守る中で自分で排泄する。
- (7) 簡単な衣服は一人で脱ぐことができるようになり、手伝ってもらいながら一人で着るようになる。
- (8) 顔を拭く、手を洗う、鼻を拭くなどを保育士の手を借りながら少しずつ自分でする。
- (9) 走る、跳ぶ、登る、押す、引っ張るなど全身を使う運動を取り入れた遊びや、つまむ、丸める、めくるなどの手や指を使う遊びを楽しむ。
- (10) 自分の物、人の物の区別に気づくようになる。保育士の適切な援助によって自分の物の置き場所が分かる。
- (11) 保育士の仲立ちによって、共同の遊具などを使って遊ぶ。
- (12) 身の回りの小動物、植物、事物などに触れ、それらに興味、好奇心を持ち、探索や模倣などをして遊ぶ。
- (13) 生活に必要な簡単な言葉を聞き分け、また、様々な出来事に関心を示し、言葉で表す。
- (14) 保育士と一緒に簡単なごっこ遊びをする中で言葉のやりとりを楽しむ。
- (15) 絵本や紙芝居を楽しんで見たり聞いたりし、繰り返しのある言葉の模倣を楽しむ。
- (16) 保育士と一緒に、水、砂、土、紙などの素材に触れて楽しむ。
- (17) 保育士と一緒に歌ったり簡単な手遊びをしたり、リズムに合わせて、体を動かしたりして遊ぶ。

3 歳児の保育の内容

内容

[基礎的事項]

- (1) 一人一人の子どもの平常の健康状態や発育・発達状態を把握し、異常を感じる場合は速やかに適切に対応する。また、子どもが自分から体の異常を訴えることができるようにする。
- (2) 施設内の環境保健に十分に留意し、快適に生活できるようにする。
- (3) 一人一人の子どもの気持ちや考えを理解して受容し、保育士との信頼関係の中で、自分の気持ちや考えを安心して表すことができるなど情緒の安定した生活ができるようにする。
- (4) 食事、排泄、睡眠、休息など生理的欲求が適切に満たされ、快適な生活や遊びができるようにする。

4 歳児の保育の内容

内容

[基礎的事項]

- (1) 一人一人の子どもの平常の健康状態や発育・発達状態を把握し、異常を感じる場合は速やかに適切な対応をする。また、子どもが自分から体の異常を訴えることができるようにする。
- (2) 施設内の環境保健に十分に留意し、快適に生活できるようにする。
- (3) 一人一人の子どもの気持ちや考えを理解して受容し、保育士との信頼関係の中で、自分の気持ちや考えを安心して表すことができるなど、情緒の安定した生活ができるようにする。
- (4) 食事、排泄、睡眠、休息など生理的欲求が適切に満たされ、快適な生活や遊びができるようにする。

5 歳児の保育の内容

内容

[基礎的事項]

- (1) 一人一人の子どもの平常の健康状態や発育・発達状態を把握し、異常を感じる場合は速やかに適切な対応をする。また、子どもが自分から体の異常を訴えることができるようにする。
- (2) 施設内の環境保健に十分に留意し、快適に生活できるようにする。
- (3) 一人一人の子どもの気持ちや考えを理解して受容し、保育士との信頼関係の中で、自分の気持ちや考えを安心して表すことができるなど、情緒の安定した生活ができるようにする。
- (4) 食事、排泄、睡眠、休息など生理的欲求が適切に満たされ、快適な生活や遊びができるようにする。

6 歳児の保育の内容

内容

[基礎的事項]

- (1) 一人一人の子どもの平常の健康状態や発育・発達状態を把握し、異常を感じる場合は速やかに適切な対応をする。また、子どもが自分から体の異常を保育士に訴えることができるようにする。
- (2) 施設内の環境保健に十分に留意し、快適に生活できるようにする。
- (3) 一人一人の子どもの気持ちや考えを理解して受容し、保育士との信頼関係の中で自分の気持ちや考えを安心して表すことができるなど、情緒の安定した生活ができるようにする。

- (4) 食事、排泄、睡眠、休息など生理的欲求が適切に満たされ、快適な生活や遊びができるようにする。

4. 保育者養成における「環境」について

(1) 幼稚園教諭養成

教育職員免許法の別表第一、第三欄に「大学において修得することを必要とする最低単位数」が示されている。この中に「教職に関する科目」がある。（表1）

表1 教育職員免許法（昭和二十四年五月三十一日法律第百四十七号）別表第一（第五条、第五条の二関係）

第一欄		第二欄	第三欄			
免許状の種類	所要資格	基礎資格	大学において修得することを必要とする最低単位数			
			教科に関する科目	教職に関する科目	教科又は教職に関する科目	特別支援教育に関する科目
幼稚園教諭	専修免許状	修士の学位を有すること。	六	三五	三四	
	一種免許状	学士の学位を有すること。	六	三五	一〇	
	二種免許状	短期大学士の学位を有すること。	四	二七		
備考						
四 この表の規定により小学校、中学校、高等学校若しくは幼稚園の教諭の専修免許状若しくは一種免許状又は小学校、中学校若しくは幼稚園の教諭の二種免許状の授与を受けようとする者については、特に必要なものとして文部科学省令で定める科目の単位を大学又は文部科学大臣の指定する教員養成機関において修得していることを要するものとする（別表第二及び別表第二の二の場合においても同様とする。）。						
五 第三欄に定める科目の単位は、次のいずれかに該当するものでなければならない（別表第二及び別表第二の二の場合においても同様とする。）。						
イ 文部科学大臣が第十六条の三第三項の政令で定める審議会等に諮問して免許状の授与の所要資格を得させるために適当と認める課程（以下「認定課程」という。）において修得したもの						
ロ 免許状の授与を受けようとする者が認定課程以外の大学の課程又は文部科学大臣が大学の課程に相当するものとして指定する課程において修得したもので、当該者の在学する認定課程を有する大学が免許状の授与の所要資格を得させるための教科に関する科目として適当であると認めるもの						
六 前号の認定課程には、第三欄に定める科目の単位のうち、教職に関する科目又は特別支援教育に関する科目の単位を修得させるために大学が設置する修業年限を一年とする課程を含むものとする。						

この別表第一に関連して、第五条では、教科に関する科目の単位修得方法について定めている。第五条は以下のような内容となっている。

第五条 免許法 別表第一に規定する幼稚園教諭の普通免許状の授与を受ける場合の教科に関する科目の単位の修得方法は、小学校の教科に関する科目について修得するものとし、国語、算数、生活、音楽、図画工作及び体育の教科に関する科目（これら科目に含まれる内容を合わせた内容に係る科目その他これら科目に準ずる内容の科目を含む。）のうち一以上の科目につ

いて修得するものとする。

2 学生が前項の科目の単位を修得するに当たっては、大学は、各科目についての学生の知識及び技能の修得状況に応じ適切な履修指導を行うよう努めなければならない。

これを受けて、教育職員免許法施行規則第六条に「免許法別表第一に規定する小学校、中学校、高等学校又は幼稚園の教諭の普通免許状の授与を受ける場合の教職に関する科目の単位の修得方法は、次の表の定めるところによる」とあり、第四欄「教育課程及び指導法に関する科目」において、「保育内容の指導法」の項目が設けられ、取得しようとする免許状に応じた単位数が示されている。（表2）

表2 教育職員免許法施行規則（昭和二十九年十月二十七日文部省令第二十六号）

第六条 免許法 別表第一に規定する小学校、中学校、高等学校又は幼稚園の教諭の普通免許状の授与を受ける場合の教職に関する科目の単位の修得方法は、次の表の定めるところによる。

第一欄		最低修得単位数																		第五欄	第六欄	
		第二欄		第三欄		第四欄																
教職に関する科目		教職の意義等に関する科目		教育の基礎理論に関する科目		教育課程及び指導法に関する科目						生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目				総合演習	教育実習					
右項の各科目に含めることが必要な事項		教職の意義及び教員の役割	教員の職務内容（研修、服務及び身分保障等を含む。）	進路選択に資する各種の機会の提供等	教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想	幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。）	教育に関する社会的、制度的又は経営的事項	教育課程の意義及び編成の方法	各教科の指導法	道徳の指導法	特別活動の指導法	教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）	教育課程の意義及び編成の方法	保育内容の指導法	教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）	生徒指導の理論及び方法	教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法	進路指導の理論及び方法	幼児理解の理論及び方法	教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法		
幼稚園教諭	専修免許状	二			六									一八					二		二	五
	一種免許状	二			六									一八					二		二	五
	二種免許状	二			四									一二					二		二	五

備考

<p>二 教育課程及び指導法に関する科目は、学校教育法施行規則（昭和二十二年文部省令第十一号）第二十五条に規定する小学校学習指導要領、同令第五十四条の二に規定する中学校学習指導要領、同令第五十七条の二に規定する高等学校学習指導要領又は同令第七十六条に規定する幼稚園教育要領に掲げる事項に即し、包括的な内容を含むものでなければならない。</p>
<p>三 教育の基礎理論に関する科目に教育課程の意義及び編成の方法を含む場合にあつては、教育課程及び指導法に関する科目に教育課程の意義及び編成の方法を含むことを要しない。</p>
<p>六 生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目は、小学校、中学校又は高等学校の教諭の普通免許状の授与を受ける場合にあつては、生徒指導の理論及び方法、教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法並びに進路指導の理論及び方法を含むものとし、幼稚園教諭の普通免許状の授与を受ける場合にあつては、幼児理解の理論及び方法並びに教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法を含むものとする。</p>
<p>七 総合演習は、人類に共通する課題又は我が国社会全体にかかわる課題のうち一以上のものに関する分析及び検討並びにその課題について幼児、児童又は生徒を指導するための方法及び技術を含むものとする（第十条及び第十条の四の表の場合においても同様とする。）。。</p>
<p>八 教育実習は、授与を受けようとする普通免許状に係る学校並びに小学校教諭の普通免許状の授与を受ける場合にあつては中学校及び幼稚園、中学校教諭の普通免許状の授与を受ける場合にあつては小学校及び高等学校、高等学校教諭の普通免許状の授与を受ける場合にあつては中学校、幼稚園教諭の普通免許状の授与を受ける場合にあつては小学校の教育を中心とするものとする。この場合において、小学校又は幼稚園には、特別支援学校の小学部又は幼稚部を含み、中学校又は高等学校には、中等教育学校の前期課程又は後期課程及び特別支援学校の中学部又は高等部を含む。</p>
<p>十 小学校又は幼稚園の教諭の普通免許状の授与を受ける場合の教育実習の単位は、小学校（特別支援学校の小学部及び附則第十八項第一号に規定する小学校に相当する旧令による学校を含む。）又は幼稚園（特別支援学校の幼稚部及び附則第十八項第四号に規定する幼稚園に相当する旧令による学校を含む。）において、教員として一年以上良好な成績で勤務した旨の実務証明責任者の証明を有する者については、経験年数一年について一単位の割合で、表に掲げる小学校又は幼稚園の教諭の普通免許状の授与を受ける場合の教職に関する科目（教育実習を除く。）の単位をもつて、これに替えることができる。</p>
<p>十二 小学校、中学校又は幼稚園の教諭の普通免許状の授与を受ける場合の教職の意義等に関する科目、教育の基礎理論に関する科目、生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目、総合演習又は教育実習の単位は、教職の意義等に関する科目にあつては二単位まで、教育の基礎理論に関する科目にあつては六単位（二種免許状の授与を受ける場合にあつては四単位）まで、生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目にあつては二単位まで、総合演習にあつては二単位まで、教育実習にあつては三単位まで、他の学校の教諭の普通免許状の授与を受ける場合のそれぞれの科目の単位をもつてあてることができる。</p>
<p>十三 高等学校教諭の普通免許状の授与を受ける場合の教職の意義等に関する科目、教育の基礎理論に関する科目、生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目、総合演習又は教育実習の単位は、教職の意義等に関する科目にあつては二単位まで、教育の基礎理論に関する科目にあつては六単位まで、生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目にあつては二単位まで、総合演習にあつては二単位まで、教育実習にあつては二単位まで、小学校、中学校又は幼稚園の教諭の普通免許状の授与を受ける場合のそれぞれの科目の単位をもつてあてることができる。</p>
<p>十四 小学校又は幼稚園の教諭の普通免許状の授与を受ける場合の教育課程及び指導法に関する科目に係る教育課程の意義及び編成の方法並びに教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）の単位のうち、二単位（二種免許状の授与を受ける場合にあつては一単位）までは、小学校又は幼稚園の教諭の普通免許状の授与を受ける場合の単位をもつてあてることができる。</p>
<p>十五 小学校の教諭の普通免許状の授与を受ける場合の教育課程及び指導法に関する科目に係る各教科の指導法の単位のうち、生活の教科の指導法の単位にあつては二単位まで、特別活動の指導法の単位にあつては一単位まで、幼稚園の教諭の普通免許状の授与を受ける場合の保育内容の指導法の単位をもつてあてることができる。</p>
<p>十六 保育内容の指導法の単位のうち、半数までは、小学校教諭の普通免許状の授与を受ける場合の各教科の指導法又は特別活動の指導法の単位をもつてあてることができる。</p>
<p>十七 括弧内の数字は、免許法別表第一備考第九号の規定の適用を受ける者の修得すべき単位数とする。</p>

(2) 保育士養成

保育士養成においては、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長から各都道府県知事・各指定都市市長・各中核市市長あてに「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」と題した通知が出されている(2003)。これによると、領域「環境」は科目名「保育内容」において他の領域とともに教授するよう設定されている。教授方法は演習として、5領域に区分した授業としても、あるいは5領域にとらわれない区分で授業を行っても良い事となっている。更に、それらの教科を統合する「保育内容総論」から構成されることが望ましいとされている。

【保育の内容・方法の理解に関する科目】

<科目名>

保育内容(演習・6単位)

<目標>

- 1 「保育内容」とは、保育所において保育の目標を達成するために展開される全ての内容を意味するものであることを理解させる。
- 2 領域別(健康・人間関係・環境・言葉・表現)の教科の学びと共に、それらを総合的にとらえる視点を養い、保育の全体構造の理解に基づいて、子どもの理解や保育方法について学ばせる。
- 3 保育士として、発達過程に即して子どもを理解することと、総合的に指導・援助が行えるよう実践的な力を習得させる。
- 4 「保育内容」は、5領域を視野に入れた教科(5領域に区分、5領域にとらわれず区分のいずれも可)と、それらの教科を統合する「保育内容総論」から構成されることが望ましい。

<内容>

1 保育の基本と保育内容

- (1) 保育の基本と内容・方法を理解させる
- (2) 全体構造の中で保育内容をとらえる

2 保育内容の歴史的変遷

3 子どもの発達と保育内容

- (1) 子どもの発達の捉え方と保育内容
- (2) 保育所保育指針の発達観
- (3) 保育所保育指針での保育内容の構成

ねらい・内容

5領域とは①健康、②人間関係、③環境、④言葉、⑤表現

基礎的事項

養護と教育の一体性

保育の方法(生きる喜びと困難な状況に対処する力を育てる等)

4 子どもの活動と保育環境・子どもの活動と援助

- (1) 子どもの活動の捉え方と環境
- (2) 保育の環境とは・環境構成とは
- (3) 保育者の援助とは
- (4) 遊びを通しての総合的指導とは
- 5 保育の計画
 - (1) 子どもの主体性と保育の計画性
 - (2) 保育の展開と評価
- 6 保育内容の課題
 - (1) 多様な保育ニーズへの対応と保育内容
 - (2) 幼稚園・小学校との連携
 - (3) 保育内容を学び・研究する保育者

3 「発達心理学」の位置づけ

(1) 幼稚園教諭養成

教育職員免許法の別表第一、第三欄に「大学において修得することを必要とする最低単位数」が示されている。この中に「教職に関する科目」がある。これを受けて、教育職員免許法施行規則第六条に「免許法別表第一に規定する小学校、中学校、高等学校又は幼稚園の教諭の普通免許状の授与を受ける場合の教職に関する科目の単位の修得方法は、次の表の定めるところによる」とあり、第三欄「教育の基礎理論に関する科目」において「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。）」の項目が設けられ、取得しようとする免許状に応じた単位数が示されている。このように、幼稚園教諭養成においては、幼児の心身の発達の過程を履修するように定められている。

(2) 保育士養成

保育士養成においては、2003年に厚生労働省雇用均等・児童家庭局長が通知した「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」において、保育士養成のための教育課程が示されている。別紙3「教科目の教授内容」に「保育の対象の理解に関する科目」の必修科目として、発達心理学が講義2単位科目として定められている。

また、教授内容は以下の通りである。

【保育の対象の理解に関する科目】

<科目名>

発達心理学（講義・2単位）

<目標>

- 1 保育は子どもがよき大人に発達するように援助する営みである。その子どもの発達につ

いて理解させる。

- 2 人間の受精・誕生から死までの発達を理解させる。
- 3 発達期の特徴を理解させる。
- 4 子どもの将来に影響を及ぼす保育士と子どもとの連鎖的關係を理解させる。
- 5 「保育所保育指針」の発達項目を理解させる。

<内容>

- 1 発達心理学の方法と考え方
 - (1) 何のために発達心理学を学ぶか
 - (2) 一人一人の子どもの発達を正確にとらえる必要性を理解させる。
 - (3) 人間の発達を生涯発達の視点からとらえ、それぞれの「発達段階」を理解させる。
- 2 初期経験の重要性
 - (1) 知能・性格・感情の基本を形成する乳幼児期の経験について理解させる。
 - (2) 野生児の事例、動物実験の事例から発達の課題について理解させる。
- 3 発達期の特徴
 - (1) 胎児期
 - (2) 新生児期
 - (3) 乳児期
 - (4) 幼児期
 - (5) 児童期
 - (6) 青年期
 - (7) 成人期から老人期
- 4 乳幼児期における発達援助のあり方（保育所保育指針の発達項目）

4 「環境」と発達

1. 「環境」と物に対する発達

物に対する発達として、ヘルツカは物の操作の発達を調べている（表3）

表3 物の操作の発達（ヘルツカ,1979）

1 カ月	そばにある見慣れた物を見つめ始める。さらに少しの距離は目で追うようになる。母親の顔をじっと見つめる。
2 カ月	目の前の物を追う。両眼で物を見つめることができる。手を開き、活発に腕を動かす。偶然に触れた物に気づく。
3 カ月	動いている物を左右に追い、消えたとき、そちらの方向を見ている。手に握らされたおもちゃは、ほんの少ししっかり持っている。
4 カ月	目で物を調べる。動いている物を目で追うことができる。新しい環境で、非常に興味をもってあたりを見る。目で見た物を握り、しっかり保つ。

5 カ月	動いている人を短時間、目で追う。おもちゃを注意深く観察し、それを手で扱う。日常的なコップなどがわかる。両手を見つめる。
6 カ月	目標となった対象物を、的確に手全体でつかむ。手で物を調べる。哺乳びんを自分で持って飲もうとする。
7 カ月	下に落ちた物を探す。おもちゃで、他のおもちゃや机や床などをたたく。積み木のような物を手から手に持ちかえることができる。
8 カ月	自分の手のとどかないところにある物を執拗につかもうとする。2つの物を持つことができる。
9 カ月	這うことによって新しい物に触れ、それらと遊ぶようになる。
10 カ月	おもちゃを目の前で覆いかくすと、覆いを取ろうとする。いろいろな物を操作して、試してみる。
11 カ月	人差し指、あるいは手で何かを指さす。小さな物を容器に入れることが好きである。床に物を落として、大人に拾ってもらうことを好む。
12 カ月	子どもは能動的に実験する。よく知った操作はすぐに飽きて、多様に変化させ拡大させようとする。ひもにくぐられたおもちゃのそのひもを自分のほうに引っ張る。棒で物をとること、物の場所を移すことができる。
13～15 カ月	絶え間なく物を床に投げる。ある物を示すと欲しがる。自分から小さな容器から出し入れする。物を扱うとき、主に片手を使う。
16～18 カ月	立ったまま物を投げるができる。握ること放すことは十分に発達している。少し開いているマッチ箱から小さな物を取り出そうとし、何度も失敗する。その後、割れ目を熱心に観察し、勝ち誇りたように箱を押し開ける。物を取るとき、障害物があるとそれを避ける。
19～21 カ月	液体を容器から他の容器に注ぐことができる。
22～24 カ月	ドアを開けたり、フタを回して取ろうとする。いろいろな種類の物、たとえば毛布とか布をよく触る。絵の中の猫を本物であるかのように撫でさする・砂、石、水、その他の物との接触で自然とも親しむ。
2～2 歳半	高い所の引出しから何かを取ろうとするとき、よじ登るために椅子を持ってくる。手や指の動きが発達し、違ったやり方で操作する。
2 歳半～3 歳	簡単な、食事の準備の手助けができる。靴は正しくはき、衣服の前後・左右がわかる、人形に服を着せたり脱がせたりする。いろいろな物を観察し、多くの質問をする。
3～4 歳	人の助けなく衣服の着脱ができる。自分自身のことや、物事との関係において、独立した把握ができる、はさみを使って、描かれている線を切り抜くことができる。
4～5 歳	他の子どもと一緒に積み木を組み立てて遊ぶことができる。グループ活動ができるようになる。いかに物が動くか、そして、どこにその原因があるかを知りたがる。重さの違う物を比べたり、簡単な工作もできるようになる。
5～6 歳	種々の道具や器具を活用する。何かを耐えるために、窓からひもをたらすことができる、子どもはあらゆる物を集めたがる。

ヘルツカ（1979）を元に中野（2001）が作成した表を筆者が加筆

ピアジェの思考の発達段階では、誕生から1歳半・2歳頃までは前理論的思考の段階であり、感覚運動期にあたる。その後、1歳半・2歳から6、7歳は表象的思考期であり、具体的操作期となる。具体的な物を操作することから、それに見立てた物を操作し、数的な考え方が行なわれる。

2. 「環境」と人に対する発達

図1は発達期の様相をまとめたものである。

人に対する発達については、社会・情緒的発達の対人関係の側面、また自分自身に対する側面に注目する必要がある。他者の認知、自己の認知の発達に注意しながら、一方で大人が子どものモデルを示す必要があることを踏まえ、保育者が良い人的環境となることの重要性を知る機会も必要である。

月 齢	運動の発達	認知的発達	社会・情緒的発達
1	頭をもちあげる	音のするほうへ向く	人の話声のするほうへ頭を向ける
2	腹ばいで胸をそらす	動くものを眼で追う	動く人を注視する
3	眼の前のものに手がとどく	あちこち自由に見まわす	初めての場所に反応する
4	支えられて座る	笑って話しかけるとはほえむ	声で気持ちを表す
5	ものをにぎりしめる	急に見えなくなったものを探す	声を立てて笑う
6	指先でものをつまむ	ものを口にもっていく	甘え泣き要求が通らないと泣く
7	ひとりで座れる	音を出すことに関心を示す	鏡に映った自分の像にほえむ
8	片手で持っているものをもう一方の手でつかむ	隠されたものを探し出す	鏡に映った自分の像にほえむ
9	つかまり立ちする	コップを手を持つ	手を伸ばして鏡のなかの自分の像を叩く
10	つかまり立ちする	絵本の絵を見つめる	鏡に映ったものを鏡に押しつける
11	つかまり立ちする	絵本のページをめくる	自分のものを指させる
12	ひとり歩きする	コップを手持つてのめるようになる	「頂戴」に反応するが手離さない
13	通って階段を昇る		「いけません」に反応する
14	親指と人差し指しゅびでものをもち		「ちょうだい」といわれると渡す
15	できる		ボールを投げ返す

図1 発達期の様相

永野・依田（1984）を若井（1994）が改変

5 おわりに

領域「環境」と発達のかえ方について、筆者が実際に実習事前事後指導を行っている場面に
おいて、学生の声というかたちで問題が示されたが、この問題は非常に大きなものであった。
本稿ではそれを解決する試みとして、保育者を目指して保育者養成校に在学している学生にど
のような養成が行われているのか、関係する法令や通知等をそれぞれ確認しながら養成内容に
ついての整理と、領域「環境」の内容をより深めるための基盤となる発達心理学の養成課程と
その内容の整理を行った。

養成課程の内容については、特に保育士養成課程において細かく規定されている。幼稚園教
諭より保育士の方が対象とする年齢の幅が広い事に加え、保育所保育の特徴である養護に関す
る事項が記載されているためである。しかしながら、認定子ども園の誕生や、幼稚園の対象年
齢拡大は、今後養成内容の変更が必要である。

保育の内容として5つの領域が設けられており、その1つに本稿で取り上げた「環境」があ
る。本来は保育の内容として発達を促すための「環境」であるが、「環境」をより良いものに
するための配慮には、発達心理学の視点は必要不可欠である。保育内容と発達の視点が車の両
輪として有機的に結合し、より良い保育を作り出す必要がある。そのためには、保育内容と発
達心理学の学びが結合できるよう、実習を実践の場として有効に活用する必要がある。実習を
行う全ての学生が確実な学びとなるよう、各人が事前に知識を確実なものとしておくことは当
然であるが、実習事前指導においてはその知識を統合できるよう発達の確認や、発達と個に応
じた指導のあり方を学ぶことが出来るよう、指導する必要がある。

また、子どもの発達を保障するための視点を養成段階で身につけさせなければならないと考
える。本稿で取り上げた領域「環境」が示す環境とは、当然園内環境の事であるが、子ども一
人ひとりの育ちを支え、あるいは家族を支える視点から、保育者は子ども一人ひとりが生活し
てきた環境にも目を向ける必要が出てきている。子どもが生活してきた家庭環境、社会環境は
一人ひとり異なる。こうした一人ひとりの環境を十分に理解して、はじめて発達を支える環境
構成にとりかかる事ができる。そのために、一人ひとりの子どもを十分に理解する関わりが必
要となる。一人ひとりの子どもを理解する視点も、実習で身につけることが出来るよう、事前
に指導を行う必要がある。

教育実習・保育実習における事前事後指導も有効に活用しながら、学生一人ひとりの学びを
確実なものとし、ひいては子ども一人ひとりの成長を促す保育が出来るようにしなければならない。

引用・参考文献

- 齋藤政子 環境による保育 保育小辞典 大月書店 2006
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長 指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について（平成15年 雇児発第1209001号） 厚生労働省 2003
- 依田満寿美 保育内容「環境」の意義 環境 チャイルド社 2004
- 中野靖彦 乳幼児の自然認識の発達と「環境」 保育内容「環境」を学ぶ 福村出版 2001
- ヘルツカ 辻井正・荒井征子訳 図解乳幼児の発達 誕生から就学まで 同朋舎出版 1981
- 若井邦夫 序章 乳幼児心理学 人生最初期の発達を考える サイエンス社 1994

本稿は2007年度上田女子短期大学研究助成費による研究である。